

Title	クルト・トゥホルスキー「チーズの穴はどこから来るの-?」(1928)ほか
Sub Title	Kurt Tucholsky : „Wo kommen die Löcher im Käse her-?“ (1928) und andere Kurzprosa (Übersetzung)
Author	山口, 祐子(Yamaguchi, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.67 (2025.) ,p.1- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20251031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(翻訳)

クルト・トゥホルスキー 「チーズの穴はどこから来るの——？」 (1928) ほか※

山口 祐子 訳・解題

「チーズの穴はどこから来るの——？」(1928)

その作品は、作中博識がぎっしり煮詰められているというだけでもう感服せざるをえない、とりわけ、大部分が穴だらけのエメンタルチーズを思わせるような教養しか持ち合わせていないわたしのような読者にとってはなおさらだ。

アルフレート・ポルガー

夕べにお客さんを迎えるようなことがあると、子供たちは先に食事をする。大人たちが話していることが子供たちにすべて聞こえる必要はないし、

※ テキスト：Kurt Tucholsky: „Wo kommen die Löcher im Käse her – ?“, in: Ders.: *Das Lächeln der Mona Lisa*, Berlin 1928, S. 321–327; Peter Panter(d.i. Tucholsky): „In der Hotellhalle“, in: *Vossische Zeitung* Nr.190, 10. 8. 1930, wieder in: Kurt Tucholsky: *Gesamtausgabe. Texte und Briefe*, Band 13 (herausgegeben von Sascha Kiefer), S.299–303; Kurt Tucholsky: „Das Lottchen“, in: Ders.: *Lerne Lachen ohne zu weinen*, Berlin 1931, S. 303–320. 訳注及び解題の作成にあたっては批評版全集を参照: Kurt Tucholsky: *Gesamtausgabe. Texte und Briefe*, Bde 1- 22. Herausgegeben von Antje Bönitz u.a., Reinbek 1996–2011. 以下批評版全集に関する情報は (GA 巻号 / 頁数) と記す。

すべて聞かれるのは不適切だし、それに子供たちに予め何か食べさせておいたほうが安くすむ。出されているのはオープンサンドイッチだ。ママも一緒に少しつまんでいる。パパはまだ帰っていない。

「ママ、ゾンニヤがね、もうタバコを吸えるって言うんだよ——でもまだ全然吸えないよね！」——「食事中にお話してはいけませんよ」——「ママ、見て。チーズに穴があいている！」——二人の子供の声が同時に「トビーってバカだね！ チーズにはいつも穴があいてるでしょ！」泣きそうな男の子の声「そうなんだけど——でもどうして？ ママ！ チーズの穴はどこから来るの？」——「食事中にお話してはいけません！」——「だって知りたいんだもん、チーズの穴はどこから来るのかって！」——いったん沈黙。ママ「穴ね……だからチーズにはいつも穴があいているの、お姉さんたちの言う通りです！ ……チーズには要するにいつも穴があいているものの」——「ママ！ でもこっちのチーズには穴はあいてないよ。どうしてこれには穴がなくて、こっちには穴があるの？」——「もういいから黙って食べなさい。もう何百回も言ってるでしょ、食事中にお話してはいけません！ 食べなさい！」——「ブウウ——！ でも僕は知りたいんだもん、どこからチーズの穴が……痛っ、だからさっきから蹴らないでってば……！」大騒ぎ。パパ入場。

「いったいどうしたっていうんだ？ ただいま！」——「もう、坊やがまたお行儀が悪くて！」——「僕はじえんじえんお行儀悪くないもん！ ただチーズの穴がどこから来るか知りたいだけなの。こっちのチーズには穴があるし、これには穴が無いの——！」パパ「まあまあ、だからってそんなにわめかなくてもいいだろう！ ママが説明してくれるさ！」——ママ「あなたったらまたこの子を甘やかして！ 食卓は食事をするところでお話するところではありません！」——パパ「子供が何か聞いてきたら、それはやっぱり説明してやってもいいだろう！ と、わたしは思うが」——ママ「^{いっだって} ^{子どもたちの前だと} ^{そういうこと言うのよね} *Toujours en présence des enfants*！ わたしがこの子に説明した方がいいと思えばとっくに説明しています！ さっさと食べなさ

い！」——「パパ、それでもやっぱりチーズの穴がどこから出て来るのか、それでもやっぱり僕は知りたいよ！」——パパ「つまりチーズの穴か、これは製造過程でできる。つまりチーズはバターとミルクから作るが、そのときこれは発酵する、そのとき湿気がでる。スイスでは実にうまいチーズができるんだ——おまえが大きくなったら、いつかスイスについてきてもいいぞ、そこにはこんなに高い山がいくつもあって、その上には万年雪が積もっている——すごいだろう？」——「うん。でもパパ、チーズの穴はいったいどこから来るの？」——「いま説明してやったばかりだろう。それは、チーズを製造するときに、チーズを作るときにできる」——「うん、でも……いったい穴はどうやってチーズの中に入ってくるの、穴は？」——「坊主、もうお前の穴問題をほじくりかえすんじゃない、ベッドに行きなさい！ ほらほら！ もう寝る時間だ！」——「いやだ！ パパ！ まだ寝ないもん！ 先に教えてよ、どうやって穴がチーズに……」ゴン。頭に一発。とてつもないわめき声。チャイムが鳴る。

アドルフおじさん。「こんばんは！ こんばんは、マーゴット——どうも——調子はどうだね？ 子供たちは何をしているのかな？ トビー、いったい何をそんなにわめいているんだい？」——「僕は知りたいの……」——「静かにしなさい……！」——「この子が知りたいのは……」——「さあ、もう坊やをベッドに連れて行って、バカげた話はおしまいにしてくれ。どうぞこちらへ、アドルフ、我々紳士はしばらく客間へ行くことにしましょう。ここで食卓を整えますから！」——アドルフおじさん「おやすみ！

おやすみ！ 大きな泣き虫さん！ さあもう泣くのは……！ あの子はどうしたんだね？」——「マーゴットがてこずってしましましてね——坊やはチーズの穴がどこから来るのか知りたがったんですが、説明してやらなかったんですよ」——「それで、お前は説明してやったのかね？」——「もちろん私が説明してやりましたよ」——「結構、タバコは吸わない——それで、お前はチーズの穴がどこから来るか知っているのかね？」——「なんと、これはまた変なことをお聞きになる。もちろん私はチーズ

の穴がどこから来るのか知っていますとも！ 穴は製造過程で湿気により生じるのです……すごく簡単なことじゃありませんか！」——「おやおや、お前ときたら……坊やにとんでもない説明をしたものだ！ 全然説明になっていないじゃないか！」——「なんと、気を悪くしないでいただきたいが——おじさんこそ変ですよ！ ではチーズの穴がどこから来るのか、おじさんは説明できるとでも？」——「おかげさまで、できるがね」——「だったらどうぞ」

「つまりだ、チーズの穴は、チーズの中にある、いわゆるカゼインと呼ばれるものによって生じる」——「そんなバカな」——「バカなことではない」——「それはきっと間違いですよ、これはカゼインとはまったく……やあどうも、マルタ、どうも、オスカー……どうぞ座って。調子はどうだい？ ……カゼインとはまったく関係ないんですから！」

「お二人とも一体何を言い争っておられるので？」——パパ「もうお前に頼むよ、オスカー！ お前は大学を出たんだろう、それに弁護士だし。チーズの中の穴は、カゼインとなにか関係があるのかね？」——オスカー「いいえ。穴の中のチーズ……いや私が言いたいのはチーズの中の穴の原因はというのですね……つまり穴は、チーズが発酵の際に生じる熱気で急速に膨張することでできるのです！」急に同盟を結んだ好戦的な勇士たちすなわちパパとアドルフおじさんの高笑い。「ハハ！ ハハハ！ なんて奇妙な説明だろう！ チーズが膨張するって！ おい聞いたか？ ハハ……！」

ジギスメントおじさん、ジェニーおばさん、グッゲンハイマー博士とフラッケラント所長登場。口々に「こんばんは！ こんばんは！ ——……ですか？ ……ちょうど話していたところで……大変に奇妙ですらある……よりによってチーズの中の穴！ ……食事はもうすぐです……だったらどうぞ、それならあんたが説明してくれ——！」

ジギスメントおじさん「つまり——チーズの中の穴は、チーズが発酵の際に生じる冷気で収縮するためにできるのです！」高まるざわめき、騒音、

やがてフルオーケストラで口々に大声が飛び出す。「ハハ！ 冷気のせいだと！ 冷えたチーズを食べたことがあるとでも？ あなたがチーズを作る人でなくてよかった、詭弁士さん！ 冷気のせいだと！ ヘヘ！」ジギスムントおじさんはムッとして部屋の隅に消える。

グッゲンハイマー博士「この問いに決着をつける前に、そもそものチーズのことなのかをはじめにおっしゃっていただかねばなりません。と申しますのもチーズの種類によるでしょうから！」ママ「エメンタールですの！ わたしたち昨日買ましてね……マルタ、わたしはこの頃いつもダンツェルで買っているの、ミシェヴスキではもう満足できないわ、あの店は最近わたしたちのために最高級品をあちらに送ってくれたのだけど、あれはまったく……」グッゲンハイマー博士「えー、もしエメンタールならば、ことは簡単です。エメンタールに穴があるのは、ハードチーズであるからです。ハードタイプのチーズにはすべて穴がありますからね」

フラッケラント所長「みなさん、ここはおそらくまた実務家の人間の順番でしょう……みなさんはほとんどが大卒でいらっしゃいますから……」（反対する者無し）。「えー、チーズの穴とは発酵過程で生じる崩壊生成物ですな。はい。その……チーズが崩れますと、まさしく……なんとなればチーズは……」全員の親指が下を向き、民は立ち上がり嵐が巻き起こる¹⁾。「ヘッ！ それは私だって知っている！ 化学式で本件は解決しない！」甲高い声で「百科事典は無いのかしら——？」

一同書斎へ突進。ハイゼ、シラー、ゲーテ、ベルシェ、トーマス・マン、古い寄せ書き帳—— 一体どこに……あった！

せっかいがん ～ ちいたあ

地域、値域、地域格差、地域格差是正、チーク、小さき花、小さな政府、智異山、チーズ！「ちょっと見せて！ ちょっとどきなさい！ 失礼！ なになに『ある種のチーズに備わる水泡状の性質は密閉されたホエーの

1) テオドル・ケルナー Theodor Körner (1791–1813) の詩「男と少年」（詩集『豎琴と剣』所収）の冒頭として知られる一節（GA10/823f.）。

糖分から生成される炭酸の発生に起因し』」全員異口同音に「ほら。言ったとおりでしょう？」……『炭酸の発生に起因し、また……』その先は何と書いてある？ マーゴット、お前このあと一ページ分切り抜いたのか？　なんてことだ、これはひどい——キャビネットの傍にいたのは誰だ？　子供たちか……？　どうしてキャビネットに鍵をかけておかないんだ？」——「どうして鍵をかけておかないんだ、なんてよく言えたものね——わたしは何百回も言いましたよ、鍵をかけてくださいって——」——「それはさておき。つまり誰が正しかったかというと？　あなたの説明は間違いました。私の説明が正しかったのですね」——「あなたは、チーズが冷えるとおっしゃったのですよ！」——「あなたこそチーズが冷えるとおっしゃったのです——私は、チーズが熱を帯びると言ったのです！」——「でしょうね、それならあなたがたは、そこに載っている炭酸性の糖ホエーのことなんて一言も言わなかったでしょ！」——「お前の言ったことなどそもそもナンセンスだ！」——「あんたにチーズの何が分かるって？　あんたはボレ社製のヤギのチーズと古いオランダチーズの区別もつかないじゃないか！」——「オランダチーズを食べた量ならわたしのほうがあんたより多いでしょうが！」——「わたしと話すときは唾を飛ばさないで！」全員一斉に話し出す。

聞こえてくるのは以下の通り。

——「わたしの客ならいい加減まともな振る舞いをしていただきたい……！」「吠え面の炭酸野郎……」——「そもそもわたしに指図するな！」……「スイスチーズなら——そう！　エメンタールチーズなら——ちがう！　……」——「ここはあんたの家じゃない！　ここにいるのはまともなひとたちで……」——「どこにいるのがまともだってー？」——「撤回しろ！　即刻撤回しろ！　わが家でわたしの客を侮辱するのは許さん！　すぐここから出ていけ！」——「ああ出ていくとも！　せいせいする。お前の出す食べ物など要らぬわ！」——「もう二度とうちの敷居はまたぐなよ！」——「みなさん、しかしそれでは……！」——「あなたは黙ってい

てください—— 一族の人間ではないのですから！ ……」——「なんと、それは初耳です！」——「わたしはビジネスマンとして……！」——「まあちょっと聞いてくださいよ。わたしたちには戦争中チーズがありました——」——「それでは和解にならん！ お前が破産しようとわたしにはどうでもいい。お前たちはわたしたちをだましたのだから、もしわたしが死ぬようなことがあっても、お前はうちには入れぬ！」——「遺産を横取りするんだな！ この遺産泥棒！」——「お前のほうこそ——！」——「みんなが聞こえるように大きな声で言うておく。遺産泥棒！ そうだろう！ さあとうっと消えてわたしを訴えてしろ！」——「この悪党が！ まったく怠け者の悪ガキだ、あの父親の子なら何も不思議ではないがな！」——「それならあんたの嫁は？ あんたの嫁は何者なんだ？ あんたはいったい嫁さんをどこから連れてきた？」——「出ていけ！ 悪党！」——「わたしの帽子はどこかな？ こんな家では自分の持ち物に気をつけんと！」——「本件は後で裁判沙汰になるからな！ 覚えてろ悪党め！ ……」——「そっちこそー！」

ドアが開きゲンビンネン²⁾ 出身のエンマが現れ一言。

「おくさまあ、お食事の準備ができましたあー！」

民事名誉棄損訴訟4件。遺言状破棄2件。共同経営契約の解除1件。抵当権の解約3件。以下の動産に係る訴訟3件：共同所有の劇場定期会員資格1件、ロッキングチェア1点、電動温熱ビデ1点。家主による退去請求1件。

舞台上には悲し気なエメンタールチーズと小さな男の子が取り残されている。男の子は丸々とした両腕を上げて天を仰ぎ、世の秩序を嘆きつつ、遠くまで響き渡るような大声で叫ぶ。

「ママ！ チーズの穴はどこから来るの——？」

2) 東プロイセンの都市名。チーズ工場の拠点があった(GA10/824)。

「ホテルのロビーにて」(1930)

「一目見れば——無理が通る。」³⁾

私たちは大きなホテルのロビーに座っていた。大きなホテルのロビーではいつも映画の中にいるような感じがするが、そんな雰囲気のホテルだった——つまり映画ならそうするしかないような場所だった。5時半の5分前のことだった。私の同伴者は神経科の専門医で、診療時間は過ぎ、二人で薄いお茶を飲んでいた。お茶はあまりに高価で、「私たちはお茶をいただいた」と言っても差支えないほどだった。

「ごらんなさい」と彼は言った、「訓練にはうってつけですよ。ここで行き来しているのは——男性、女性、ドイツ人に外国人、宿泊客、訪問客……そして彼らのことは誰も知らない。だが私にはわかります。一目見ればね——多少心理学をかじっているのはけっこうなことですよ。私には人々の内面が開いた本のページをめくるように読めるのですよ」

「何を読まれるのでしょうか？」と私は彼に尋ねた。

「大変に興味深い人生の物語です。」彼は薄目を開けてあちこちを見回した。「ここで解けない謎はありません——私にはこの人たちのことがすべてわかります。どうぞ聞いてみてください」

「では……たとえば、あそこにいる男性はどうでしょう？」

「どの男性ですか？」

「あの老紳士ですよ……頬ひげを生やした……いえ、その人ではありません……ええ、その人……」

「あの人ですか？」彼は瞬く間に語り始めた。

3) ベルリン方言「Een Schlag, und de Nese sitzt hinten (直訳：一度殴れば鼻が引っ込む)」のもじり (GA13/680)。

「あれは……あの男性は、ごらんのとおり、老皇帝フランツ・ヨーゼフに瓜二つです。まさに皇帝の忠実な模写と言ってもよいでしょう……彼はまるで……彼はまるで、昔の書留配達人のような風貌をしていますね。書留配達人というのは郵便為替を届けてくれるというので重宝されていた者のことですが。彼の身のこなし——あの態度……この男性はウィーン出身の元宮廷官僚とお見受けします。しかも大変高い地位にすらあったのでしょう。ハプスブルク家の崩壊のおかげで彼は大変気落ちしてしまったのです、大変にね。ええ。しかし、彼が給仕と話すさまをまあごらんください。あれは貴族ですね。間違いなし。貴族。ごらんなさい——あの男の中には舞踏会場の、ウィーン、オーストリアの旧時代の文化そのもの、馬術を堪能した乗馬学校、ああ、汝、幸いのオーストリアよ⁴⁾……あれはきつと閣下とよばれた人ですね——どこか高貴な一族の。そんなところですよ」

「驚いた。これはまったく——驚くべきことで。一体どこからそんなことがわかるのですか？」

彼は得意げに微笑み、また実際自尊心をくすぐられたようだった。この男、どこまで見栄っ張りなんだか！ ——「申し上げた通り、これは訓練なのです。私は診療時間中に習得したのですがね——私はシャーロック・ホームズではありません、とんでもない。私はどこにでもいる神経科医です——ただ、ある種の見る目があるというだけで。このような目ですがね」彼は満足げにタバコを吹かした。

「それではあの後ろにいるご婦人はどうでしょう？ あそこのテーブル席に座って誰かを待っているようなかんじの——ほら、彼女はずっとドアの方に目を向けているでしょう……」

「あの女性ですか？ これはあなた、思い違いですよ。あの婦人は待っているわけではありません。少なくとも、ここでは誰かを待っているのではありません。彼女が待っているのは……いや、待っているのは確かだな。

4) ハプスブルク家の婚姻政策についての箴言「戦争は他の者に任せよ、汝幸いなるオーストリアよ、結婚せよ」より (GA13/680)。

奇跡を彼女は待っているのですな。さて……しばらくお待ちを……」

彼はベストのポケットから片眼鏡を取り出しいったん目にはめた、片眼鏡のほうは具合がよくなかったのだろう、彼はまたその位置を調整した。

「この人物は……数少ない大物の高級娼婦の一人ですよ、このような連中がまだこの気の毒な世界に残っているのです。あなたをご存じでしょうが、高級娼婦などというのはその言い回しと同じで死に絶えつつあります。プチブル娼婦との競合でね……。ええ、私が申し上げたかったのは、売春の女王だということ。控えめに言うと、偉大な、実に偉大なる花柳界の娼婦です。なんと……なんということだ……あの手の動き、ご覧になりましたか？ あれは男たちをむさぼり食う。あの動きで男たちが食われるのです。これは……それにあの目……とにかく彼女の目をじっと見つめてみてください……じっと見つめるのです……あの目には哀悼コンプレックスが宿っている、シダレヤナギだらけの庭そのものです。この女性は欲しがるのです、充足感で満たされることなどなかったというのに、多くの充足感が欲しくてたまらないのです。この点に疑う余地はありませんね。彼女が探しているものがいつか見つかるのかどうかは疑わしいところですが。彼女が持ちたがっているのは大変に難しいものです——大変に難しい。この女性はすべてを手にしてきたのです、自分の人生の中で——すべてをね。そしてこれからもっと欲しがる。それは簡単なことではありません。あのヴェールに覆われた物憂げな様をごらん下さい！ 一人の男が彼女のせいで命を絶ったのかもしれませんが——そうかもしれない——これは正確には申せません。私は全知全能ではありませんから。私はただ精神こころを扱う医者です……このような女性を愛した経験を持ちたいものです。おわかりですか——愛したいのではなく！ 愛した経験です。こういう女性を愛するのは危険です。大いに危険。ええ」

「ドクター……あなたはカリオストロ⁵⁾ かなにかで……あなたの患者た

5) アレッサンドロ・ディ・カリオストロ Cagliostro, Alessandro di (1743-1795)。冒険家・錬金術師。スピリチュアルなものや靈感療法への傾倒に

ちにとっては笑えないことですよ」

「私は誰にも騙されませんよ」, と彼は言った。「私はね。あなたはまだほかに何をお知りになりたいのでしょうか? セっかくですからついでに……」

「あそこの男性! ええ, ちょうど立ち上がろうとしているあの太った男——出ていこうとしています——いや, また戻ってきた。あの少し赤ら顔の男性。彼は何者でしょうか?」

「さて, あなたはどう思われますかな?」

「ええと, ……うーん, いまどきは誰でも同じように見えますが……もしかしたら……」

「誰もが同じようにですと? あなたには本当に見えていないのですね——見えるかどうかは全てです。簡単なことなのですが」

「といいますと?」

「その男はワインの販売業者ですよ。社長本人か, ワインを扱う大企業の支配人です。エネルギーで, 教養のある男です。それに意志の強い男——ほとんど笑うことはなく, ワインを扱っているのにユーモアをあまり解さない, そんな男です。真面目な男。実業界の男。厳格だ。人間がたくさん集まるところを嫌う。真面目そのもの。そんな人です」

「ではあそこの女性? この小柄で, ややありきたりなかんじのするマダムは?」

「パンターさん, どうしてそんなことをおっしゃるのですか! この人は——(片眼鏡をつける)この人は, 従順できちんとした, ブルジョワのご夫人ですよ, 田舎からでてきた……(片眼鏡をまた元の位置に戻す)——従順なご夫人です, 少なくとも四人の子を持つ母親で, 小市民一家にとっての名誉なるものにとらわれて育ち, ——この人は毎週日曜日に教会に行きますね——夫のために料理をし, わが子のためにズボンや服のほころびを繕ってやるのです——すべてがきちんとしています。彼女は忠実で

より山師、詐欺師とも称される (GA13/680)。

正直で、いかなる時も神の道を外れません⁶⁾……昔の歌にあるとおりです」

「それではあそこにいる男性はどうですか、ドクター？」

「ほら——あれこそ我々の時代に典型的な金持ちです。まさに金持ちそのもの。この場で彼の半生を語ることにすらできるかもしれません——それくらいははっきり私にはこの人間の心が見えます。金の亡者。打たれ強い強欲な男。あの男を打ち負かすことはできませんね。儲けにならない仕事には手を出さない。本は読まない。自分のビジネス以外のことは一切気にしない。そこにいるのはアメリカナイズされたヨーロッパ人です。女たちとは——おやおや！ ——6時ですね……お気を悪くしないでいただきたいのですが——もう一件、急ぎの用事が入ってしましてね。すぐ車を呼ばなければ。おい、勘定！ ——あー、お勘定をお願いできますかな……」

給仕が来て、支払いを受け、去った。

「おいくらですか？」私は冷やかしのつもりで尋ねた。

「値段なんて——とんでもない。お元気で！ いや……また近いうちに！」彼は去っていった。

*

すると好奇心が私をとらえ、やがて私は誘惑に負けた。分析を受けた犠牲者たちはみんな、まだその場に座っていた——まだみんないる。私はロビー全体がよく見渡せる位置についていたベルボーイにすり寄っていった。それから彼と話した。それから少しばかり彼の手に握らせた。そして私は尋ねた。そして彼は答えた。それから私はこんなことを聞き出した。

オーストリアの宮内官はグライヴィッツから来たミシン業者だった。哀悼コンプレックスの大物高級娼婦はシカゴから来たビムスタイン夫人とか

6) ヘルティ Ludwig Christoph Heinrich Hölty (1748–1776) の詩「老いた農夫から息子へ Der alte Landmann an seinen Sohn」(1775) の冒頭「常に忠実で正直であれ / お前が冷たい墓に入るまで / そして手を休めることなく / Von 神の道を外れることなかれ」にちなむ (GA13/680)。

いう人だった——ちょうど彼女の夫も彼女のいるテーブルについたところだ、間違いなくビムスタイン氏だろう。ワインを扱う大企業の支配人はピエロのグロック⁷⁾だった。太っちょのおっかさんは、マルセイユにある、客を手厚くもてなしてくれる宿の所有者だった。そして生意気な金持ちは、最年少ドイツ派⁸⁾の前衛詩人だった——。

そして心理学者だけが、心理学者のままだった。

「ロッテちゃん」(1931)

1. 到着

愛人の男「やあこんにちは、ロッテちゃん—— さて、調子はどうだい——？」

ロッテちゃん(続けざまに)「——どうも！ ちょっとこれ持って、ちょっと待って……ここでもうししないと……けっこう待った？ え？ ナニ？ え？ このドアちょっと開けて、けっこう待った？ なんてまたこのオテル^{ほてる}にしたの、え？ ねえ、わたしの車どう思う？ ロッテちゃん2号。そう、びっくりしたでしょ、ね？ もうあと少しでローン完済。けっこう待った？ わたしのスーツケースここで運んでもらえるわね……ちがう！ そっちじゃなくて！ こっち！ そこのあなた！ それ持ってどこ行くの——あ、そう……いや、やっぱりだめ！ こっちのノズルがジェネレータの中に落ちちゃったの、これがその中に……ダディじゃわからないね、もう、車に疎い男ってうんざり！ ダディ、ちょっとどいて、ハブの

7) グロック Grock (1880–1959)。実在したスイス出身の大道芸人であり道化師 (GA13/680, 809)。ピエロのグロックとして世界的な成功を収めていた。

8) 1920年代にはクラウス・マンを中心とした作家集団が一時「Jüngstes Deutschland」を名乗っていた (GA13/680)。

上でホイールをちょっと動かすから——ちょっと気をつけて！ 気をつけて
 ってば！ たしかフルーツをグラモフォンの中に入れておいたんだけど
 ……ええ、もちろんハットケースの中、ほかにどこがあるのよ？ その箱
 の中じゃなくて、——そこはアルトゥルの仕事用の書類が入ってるの、わ
 たしだって夫のことは考えるんだから、あなたはしないでしょ！ ちょっと
 とそこの人に言ってよ、こっちのこれを持ってあっちへ運んでって——ほ
 んと、バカじゃないの！ ……ちょっと待って、とりあえずハンドブレイ
 キをエンジン用ボックスの中に入れないと、ハンドブレイキはそこに入れて
 おくものなの。ダディにはわからないって！ ねえ、ダディ、そんなこ
 とも思いもしないでしょ……なんでまたこのオテルにしたの、え？ けっ
 こう待った？ ダディ、ダディが思いもしないことがあるの、えっと、ヴィ
 ッテンベルクに近いところで右にカーブを切ろうとしたの、あそこってけ
 っこうなカーブがあるの、そしたら左からね、見えなかったんだけど、ア
 メ車がブォーンって音立てて向かってきたの、わたしは何にもぶつけずに
 さっとよけた、わかるでしょ、ロッテちゃんは抜かりないからね、それに
 左側、だから左側よ——ほんとになんでって……ダディ、いいかげんロッ
 テちゃんに教えて、**なんでまたこのオテルにしたの？** そう、それで左側
 には羊の群れがいたの、まあ聞いてよ、それでロッテ号が羊の群れに突っ
 込んだの。あの^{役立たず}ハンメル羊飼いの男、いや、そっちじゃなくて……でも本物
 の^{去勢羊}ハンメル4頭と83頭の羊の群れに突っ込んで……お金出したかって？
 彼が私にお金出してくれるならともかく……！ あの男なら……ここって
 エレベーターはどこ？ わたし役所で言ってやった、まあ、わたしのこと
 だからわかるでしょ！ ロッテちゃんはすぐおまわりさんに色目を使った
 のね、そしたら羊飼いの男、これがまたこっぴどく叱られたの、羊のせい
 だって、だって勝手にうろうろしてたんだからね、それでロッテちゃんは
 無罪放免になったわけ！ あなたもそう思う？ ここってエレベーターは
 どこなの？ ナニ？ 動いてない？ ダディ！ わたしまた出なきゃ！
 ねえ、ちょっと待ってったら！ ねえ、何考えてるの？ ああ、路上駐車

のままでいいって言いたいのか？ いやいやいや——ちょっと！ そのあなた！ このオテルのロビーにガレージはついてないんですか……つまりその……ええ、素敵なオテル——ちょっとどいて——ええ、わたしは「オテル」って言いますよ、そのほうがお上品だし……いや、ぜんぜんわかんない……だから、ダディ——おたくのガレージはどこ？ ナニ？ え？ え？ 全然見えない……それはいいわね、ロッテちゃんの車に憩いの場をあげて！ この車をちょっとこっちに回してちょうだい、ええここにあるから……ちょっと邪魔しないで——この人にお金を渡すんじゃないの、ただ小さいほうのスーツケースを渡すだけ、これならもう片方の肩にかつげるでしょ——もちろん支払いはダディ！ え、もしかしてわたしに支払えって言うの？ ねえ、ダディ、わたしが車も部屋に持ち込むつもりだとも思った？ ねえ、悪く思わないでよ……！ そのあなた——！ あの人もういなくなっちゃった。さてと、まあ入って。さあそんなところにつ立ってないで。えっとね、ロッテちゃんは途中でとびきりのいい男をつかまえたの！ アルゼンチンの人、シュツとして、エレガントで、真っ黒な瞳をして、すぐに自分の連絡先をくれたの、まあ、わたしはわたしのダディー筋けどね——ダディ、ガレージはそんなに高くないみたい、一日4マルクだって。え？ ダディには高すぎるって？ エレベーター動いてない……ダディ、エレベーター動かないってどうなの？ ほかにエレベーターないのかしら——このためにインターラーケンからわざわざ来たのに、ブレイメンで階段を上るなんて……ねえダディ、こんなのばかばかしいよね、わたしはレディーとして旅行するの、それともレディーじゃない人として旅行するの、やっぱりレディーとして旅行してそれからレディーじゃない人として旅行するの——？ そう、それでアルゼンチンの男ね、あの、わたしがハンメル群れに突っ込んだのを見かけたとたんね……ダディ、なんでこの部屋にしたの、真ん中にバスルームのついたスイートじゃないの？ そこに置いてちょうだい！ ダディ、ロッテちゃんにコーヒーを注文してあげて、ロッテちゃん喉が渴いた——まあ、ベルリンからブ

レーメンまで一気に運転してみなさいよ、あれわたしの石鹸どこ？ コーヒー注文してくれた？ ロッテちゃんのことまだ愛してる？ ねえキスしてよ——でもずいぶんお腹出てきたのね、ベルギーで食べすぎたんでしょ——ふうん……コーヒーどうなった？ ちょっとベル鳴らしてちょうだい！ 支配人呼んで、クレーム入れるから！ ダディ——！ 今度はエンジン切るの忘れてた！ 運転手がいるか聞いてみて、エンジンはすぐ切らないと、そうしないと一晩中かかりっぱなしになるの、それにあの人に言われたんだけど、オイルタンクのカソリンが切れたら——あーもう、やっぱり車を部屋に持ち込めばよかった、じゃなくて、わたしが車に残っておけばよかったのに！ ダディ、あとどのくらい時間ある？ ダディ、ロッテちゃんがまた来てくれて、何か言うことは？ ちょっと何か言ってよ！ さっきから何にも言わないんだから……」

愛人の男（消え入りそうな声で）「団結せよ——団結せよ——団結せよ——！」⁹⁾（仰向けに倒れる）

2. ロッテちゃん、財政を立て直す

「つまりこれで、今ある借金は全部だね？」

「これで全部」

「ロッテちゃん、あとになってからまた別の借金を抱えてやってきてもね——わかっているとは思いますが、去年、ルガーノでのことだよ、あれもあわせて全部払ってあげたんだから、どれだけたいへんだったことか……」

「ダディ、誓って言うけど——今度こそ本当に全部打ち明けました！ わたしのふところはすっかり非の打ちどころなくちゃんとしてます——だからほんとだって！」

「よし。それではちょっと明細を見せてもらおうか。帳簿と照合してみよう……なんてことだ、これが君の帳簿なの？」

「え、それがどうしたって？」

9) シラー『ヴィルヘルム・テル』第4幕第2場より成句的に（GA10/835）。

「この哀れなバラバラの紙きれが？」

「哀れな紙切れだってなんだっていいじゃない！ ちょっとどいて！
こっちへちょうだい——ばらばらにしないでよ——ちゃんと整理しておい
たんだから……！ キャラコで装丁した台帳とこの紙切れで複式簿記でも
つけろっていうの……ちょっとかして！」

「これはいったい何？」

「借金のメモだけど、これは関係ないわ、もう返済はすんでるから、い
え、こっちのはまだすんでない、でもまだ時間があるの。あの人たちは待
てくれる！ ケーテちゃんは待てるって」

「お友達のケーテ君はまた君に金を渡したのか？ 女性にせびってはい
けない、て言っただろう。彼女の旦那は医者で稼ぎが……ああ、わかった。
でも僕はいやだ。いくらなんだい？」

「40 マルク」

「だがここには 65 マルクとあるが？」

「ええ……それは……あとの 25 マルクは、わたしが……彼女がわたし
に……」

「つまり 65 マルクなんだね。それからこれは何？ 110 マルク？」

「これは子供たちの分、靴とソックス」

「ええと、僕の子供ではないんだが。110 マルクか。高くつく子供たち
だな。65 マルクに 110 マルク……これでは全然だめだ。ちょっとかしな
さい——僕が明細を作りなおそう！ ええと。

ケーテちゃん…………… 65

子供たち……………110

ハンケマン…………… 92

ああ、この人たちのことはもう教えてくれたね——わかった。

ルイ・ブレスト……あっそう、銀行ね、いくら？ 209 マルク？ あの
さ、ロッテちゃん、胸が痛むんじゃない？」

「なんで？ それはわたしが昔つくった借方口座で、……あなたに言っ

でもわからないわよ——ああもう、だからちょっと聞いてって！ わたしの衣装用のお金から5月に、ちがう、去年の10月に、45マルク引き出しておいたの、わかった、戻しておく、わかってるわよ、自分の口座から借りられるのよね、それでそのお金を子供たちのためのお金に入れたの、それで、旅行用のお金がガソリン代のせいで89マルク足りなかったから、次の3か月分の家賃を使ったわけ——そんなわけで銀行に借方口座があるの！ あったりめえでしょ！」

「ああ、それは当たり前だろうね。だが君は何も言わなかったじゃないか。僕は君の家計の清算をしてあげようとしているのだがね、それにこの大掃除、毎年やってるのだけど——209マルクの借入金……ねえロッチちゃん、僕の何をなんだと思っているんだ？」

「ケチなおっさん！ その200マルクのためにあなたと付き合ってるわけじゃないわ！ そもそも急ぎの案件じゃないの！ 時間はあるんだから！」

「そのままにしておくとお利息がかかるんだよ！ まあ続けよう。

ルイ・プレスト……………209

ヴェースホーフェン……………54

これは何？」

「これはあれよ、このあいだ言ったでしょ！」

「君は何も言わなかったよ！」

「わたしが何も言わなかったって？ よく言うわね！ ただ54だって言わなかっただけよ、あなたがショックを受けないようにね……部分的に認めただけ」

「いくらだって言ってた？」

「3マルク50。それはそもそも家計に入るものなの。借金だって、わたしの借金じゃない……家計の負債！」

「どこに入るの？」

「衣料費。もういいでしょ！」

「ええと、このうちいくら僕に払えっていうの……わからない。ほんとにわからなくなってきた。

ヴェースホーフェン……………54

郵便為替……………28

——郵便為替 28 マルクって……どういうこと？」

「ちょっとみせて。なんだっけ……あっそうだ！ これはパパに宛てて郵便為替で支払いをしようとしたんだった」

「君が支払ったの？」

「いいえ。パパはそのときちょうど旅行中だったの」

「金はどこだ？」

「金はどこだ！ 金はどこだって！ 変なこと聞くわね！ お金はもちろんここにはないわよ！」

「金はどこにあるのか、僕が知りたいんだ！」

「まったくもう、そのお金はネシュケさんに送金したの、お金借りてて」

「なんのために借りたって？」

「ええと、わたしね……つまり彼にまだ 48 マルク借りてるの、去年の分！ あーもう、だっていつも同じ帽子かぶってうろうろするわけにはいかないでしょ、そんなだと間が抜けて見えるし！ 女の人みんな帽子を新調するものなの、わたしだけ持ってないなんて！ そんな顔しないでよ——ネシュケさんは待ってくれるから、支払うは不要よ」

「支払い！」

「いちいち揚げ足取るのやめてよね！ 学校の先生みたいにもっとひどいわ」

「より」

「え？」

「より。学校の先生よりひどい。比較級は……」

「今文法の授業中？ それとも清算中？ 続けるわね。ネシュケは待ってくれる——彼女はミュンヘンのやつらみたいにもっとずっといい人だから」

ら」

「ミュンヘンのやつらって、どれ？」

「アッ……わたし旅行中に……ダディ、すぐ大騒ぎする必要はないわよ、大騒ぎする必要はない、で、言い方合ってるね、ミュンヘンをずっと旅行してたじゃない、そのときとっても素敵なカーコートちゃんを見つけたの……」

「コートちゃんなんていうところがもう怪しいね。いくらの？」

「……」

「だからいくら？」

「120 マルク。でもあと三年は着るから！」

「このひとは僕の骨を拾ってくれるのかね。将来こんなことはできないな。将来なんておかしな言い方だけど、君もおかしなひとだね。それでこれで借金はおしまい？」

「これでおしまい。あとは薬局のツケとお医者さんの治療代 50 マルクだけ。でもあの人にはほんとに待ってくれるから。あの人には支払い不要！

わたしが払ってもらいたくないの！ほんとにいやなの！あの人には自分で払う！彼は待ってくれるんだから！ほんとに！」

「^{ああ} ^{なんと} O Popoi。いや、今のは行儀が良くなかった。これはギリシャ語。さあ、全部書き出して、リストは札入れの中に入れて一晩寝かせておくことにしよう。まったく大変だよ、君もわかるだろう。ちゃんと下向いて！読めるように書いてよ。そうだよ、どうも。ちょっと下へ降りてタバコを買いに行ってくる——それはこっちに渡す！ ロッテちゃん、君は高くつくレディーだ。でも今度こそ全部書き出してくれたんだね？ ね？ これで全部？ これでほんとうに全部？」

「これで全部よ。間違いない。これでほんとうに全部。わたしぜんぜん高くつく女じゃないし——むしろ安すぎるくらい。わたしのクオリティならね！ またね！」

「またね！」

(ロッテちゃん)「また忘れた、あの人に22マルク分ブリッジの負けがあるって言うておくんだった！ やっちゃった！ まあ、いいか……スポーツ代につけておこう——！」

3. ロッテちゃん、浮気を白状する

「知らない人のにおいがするって？ 何それ——わたしから知らない人のにおいがしてくる？ 知らない人のにおいなんてしないわよ。ロッテちゃんにキスしてちょうだい。4週間あなたがスイスにいた間ずっと誰もキスしてくれなかったんだから。ここには何もなかったわ。ちがう——ここにはほんとに何もなかったんだって！ 何がすぐわかったって？ すぐわかったなんてことはないわよ……もう、ダディ！ ダディがわたしにとる態度とおなじくらいわたしはダディに誠実よ。いいえ、それはつまり……だから、わたしはほんとにあなた一筋なんだって！ あなたのほうこそ歌詞のリフレインに女の名前が出てくるたびに恋に落ちるでしょ……わたしはあなた一筋です……あーよかったわね！ ここには何もなかった。

……何回か劇場でね。ちがう、安い席で——まあ、一度だけボックス席だったけど……なんでそんなこと知ってるの？ ナニ？ え？ 誰が話してくれたって？ まあ、席はね……コネでとれたの……。もちろん男の人と一緒にだった。え、ひょっとしてナースと一緒に芝居にでかけろっていの……ねえダディ、あれはどうってことなかったの、全然どうってことなかった、ここではカモッラとかマフィアの中みたい、あの手の人たちがコルシカでするようなことはしないって。え、シチリア？ ——シチリアでもなんでもいいけど！ とにかくどうってことなかった。あの人たち、あなたに何て話したの？ ナニ？ ここには何もなかった。

あれはまあ……あれは……あなたはその人のことは知らないわ。まあ、そんなことはしないわよ——もしほかの男の人とお芝居に行くんだったら、あなたの知り合いとは行かないって。ひどいじゃない、今まであなたの評価が下がるようなことなんてしたことないでしょ。男ってなんでこんなに

アホなの、何かするときに、それが職場の同僚だと気を悪くするのよ。それでもし職場の同僚じゃなかったら、すぐ令嬢ジュリー¹⁰⁾ みたいって思うの！ほんとに大変！だからあなたはその人のこと知らないって！あなたは彼のこと知らない。そう——彼はあなたのこと知ってるけど。まあ、喜んだらいいじゃない、そんなにたくさんの人に知られてるなんて——有名人じゃない。あれはとにかくどうってことなかったの。まるっきり何もなし。そのあとで食事には行ったけど。でもそれ以外何もなかった。

何にも。何もなかった。あの人……あの人はずっと……わたしが彼を車に乗せてあげたりもしたけど、だって彼が隣に座るとすごく感じがよかったから、つやつやの番犬って感じで——そう、レーヴェントロウさんもそう言ってた？ まあ、わたしも同感。でも番犬にしては、っていうだけ。あの方はピカピカしてた。ええ、それは本当。素敵な口をしてて、こうタフでたくましい口元——ねえロッチェちゃんにキスしてよ、彼はばかだったの。何もなかったし。

まったくのおばかさんというわけではなかったけどね、ほんとに。それはまあ……彼に夢中になったなんてことは絶対にないわよ。わかってるでしょ、あなたとじゃないと夢中になんかならないって——あなたも喜ぶから！ いい人だった……でもああいうタイプはもう無理。わたしはいや。そもそもああいうことはもういやだし。ダディ、そんなにいい人ってことはなかったわよ、あの人。キスは上手だったし。まあそう——とにかくそれ以上のことはなかった。

ねえ、わたしのこと一体何だと思ってる？もしかして、わたしがあなたならやるだろうって思ってるのと同じことを、あなたもわたしがやると思ってる？ あなたねえ——それは勘弁してよ！わたしは浮気なんてしてない。ダディ、あの方は……あれはほんの出来心みたいなもの。だってさ、あなたってここにひとを独りにしておいて、手紙もろくに書いてこな

10) ストリンドベリの同名戯曲(1889年初演)を暗示。貴族の令嬢ジュリーは従者との屈辱的な情事の末に自殺する(GA14/498)。

いし、電話だってたった一度しかかけてこないじゃない——女がひとりぼっちでいると、あんたたち男よりずっと孤独なんだから。たしかにわたしは男は要らないけど……わたしは要らない。そんな人が必要だったこともないし。あの人はそんな勘違いしないわよ！ ただわたし考えたの。——彼に会ったとき……最初にもうわかったの、彼に会ったときにね——でも何もなかった。

お芝居の後も。それから2週間。ちがう。そう。ただバラの花と、二回お菓子をもらって、あとはそこにある小さなソープストーンのライオンをもらっただけ。ちがうって。わたしが彼に鍵を渡してるのかって？ ちょっと……！ あの人に家の鍵なんて渡したことないし！ 知らない男の人に自分のアパートの鍵なんて渡すつもりはないって……！ そんなことするくらいならわたしが彼を下まで送っていくほうがまし。ダディ、あの男のひとのことはなんとも思わなかったの——それに彼もわたしのことはなんとも思っていない——あなただってわかるでしょ。ただあの人があんなにたくましい口をしてたから……唇が薄くて。昔船乗りだったから。ナニ？ ヴァン湖^{ザー}で？ あん人は海に出たの——でっかい船に乗って、船の名前は忘れたけど、それに彼は号令だって全部言えるし。たくましい口をしてるの。とっても唇が薄くて。まあ、彼は寡黙よ。キスは上手いけど。ダディ、もしわたしがあんなにへこんでなかったら、あんなことも絶対おきなかったのに……実際何もおきなかったけど——そんなことは問題じゃないでしょ。ナニ？ 街で。ちがう、彼の家じゃなくて、わたしたち街で一緒に食事をしたの。支払いは彼だった——ね、わかったでしょ！ もしかしてわたしに知り合いの分のお金も出せっていうの……あら、それだとね……！ そもそも何にもなかったの。

タトゥーをしてたかって！ あの人タトゥーなんか入れてないし！ あん人はとってもきれいな肌をしてて、彼には……詳しいことはいい？ 詳しいことは聞きたくないって！ わたしに話してほしいなら話すし、そうじゃないなら話さない、どっちか。わたしからはこの人のことはもう一言

も聞きたくないのね。ダディ、ちょっと聞いて——もし彼が航海士とかなんとかい言う人じゃなかったら……それに言うておくけど。

第一にそもそも何もありませんでした、第二にあなたはその人のこと知りません、それに第三に彼は船乗りだったので、それでわたしは彼に贈り物はしてません、それにそもそも、パウル・グレーツ¹¹⁾がいつも言っているとおりでしょ。つかまえたとたんに、今度はこっちがって——

——ダディ！　ねえダディ！　ちょっと見せて……これ何？　ナニ？　え？　この写真何なの？　このひと誰？　え？　ナニ？　この女とどこで知り合ったって？　え？　ルツェルンで？　ナニ？　女性と何度も出かけたって？　スイスではいつもお出かけするのね。何も言わないでちょうだい……ナニ？　何もなかったって？

それはちょっと全然違うでしょ。まあ、わたしが男の人をいいなって思うことはたまにはあるけど。でもあんたたち男のほうは——？

あんたたちはすぐはまってしまいうんだから！」

4. ロッテちゃん、後悔する

「なんでもない。なんでもないって。わたし？　なんでもないの。ちがう……

そんなくだらないこと聞かないで——たまには機嫌がよくないときだってあるでしょ、え？　なんでもない。

なんでもないって。ああもう、ほっといて。まあ、ちょっとよく考えてみてるだけ。よく考えてみるのはあんたたち男だけだとも思ってるの？

11) パウル・グレーツ Paul Graetz (1890–1937)。俳優・カバレティスト。

トゥホルスキーはグレーツと1920年初頭から面識があり、1919年から20年にかけて数多くのカバレット用のシャンソンやテキストを彼のために書いている。グレーツはローザ・ヴァレティ、トルーデ・ヘスターベルク、クレア・ヴァルドルフやエルンスト・ブッシュュらと並んで、ヴァイマル共和国期にベルリンで花開いたカバレット文化の重要な担い手でもあった。1933年亡命 (GA14/498, 610, 720)。

わたしだってよく考えてます。ちがう、お金のことじゃなくて——請求書の支払いはい全部すませてる。全部！ 一ペニヒだって借金はないの。ナニ？ ツケはもうない。あとは薬局と、最近買った水槽と、仕立屋とケーテちゃんのところだけ。それ以外は無し。まあ、あとヴォペリウスさんのところに50マルクあるけど。ちがうって、お金問題じゃない。お金「の」問題ね！ いちいち文法のこと言いたがるのね——肝心なのは、わたしにお金があるってことでしょ。お金は無いけど。

ああ、あの男、あいつね……いや、何でもない。そう、あの男。船乗り、彼のことはこの前話したでしょ。彼、やっぱり船乗りっぽく少しタトゥーを入れてて、ホルシュタインの農家の青年みたいだった。いえ、わたしは一度もホルシュタインには行ったことないけど——ただそう思うだけ。彼と何があったって？ ああもう、ほっといて。

もちろん、ちがうわよ、ええそう！ 船乗りなの。いいえ、彼はもうここにはいなかった。また来るんじゃないかって、わたしはいつも思ってたけど。なんで？ なんでって！ だって彼、わたしからお金を借りてったし！ なんでそれがひどいの？ 全然ひどくない！ わたしだってあなたから時々借りてるじゃない。でもわたしは少なくとも返すなんて言わないでしょ！ いいえ、大金じゃない。どうでもいいの。もう……泣いてなんかいない。大金じゃないし。一度は50マルクで、もう一度は68マルク。それがどうしたって——？

で？ わたし、彼は二年間^{ゼー}海に出ていたって思ってた。彼がそう話してくれたの。だって、わたしのお友達は嘘つかないし……もしあの人たちがわたしに何か話してくれるとしたら、それは本当のことだし、大抵の場合真実ですらあるの。あの人たちがみんな嘘をつくとは限らないのよ、あなたが最近ミッキーとのことでやったみたいにさ。あなたあの人とまた会ったの？

彼は全然^{ゼー}海になんかにいなかった。陸よもちろん。ああもう、ほっといて。

つまり、彼はムシヨに入ってたの。

一年半。どうしてかは知らない。どこのって？ そんなのどこだっていいでしょ。プレッツェンゼーよ。

なにをやらかしたのかは知らない——そっとしておいてよ。ある人がわたしに教えてくれたの。いつも古くなった子供たちの服を引き取りに来る男がいて、ここでその人に服をあげるんだけど、彼が友達の分も頼みにきたの、その友達は最近出所したばかりだって、それでわたしたち打ち合わせを始めたんだけど、その時急にその人があいつの、船乗りの名前を口にしたの。それでばれたってわけ。みんな仲間だったの。一年半の間。あの、わたしにはバリにいるって言ってた。その頃はプレッツェンゼーにいたのに。

どうしてかは知らない。——わたしにかまわないで！ そんなことは問題じゃないの！ わたしのお金……？ わたしはすぐ警察の刑事課に行ったわ。ねえ、そこでわたしに應對してくれた男の人が　すごく感じのいい人で、その人に聞いてみたの。わたし彼に全部話しちゃった。すごくハンサムでね、その男の人——刑事調査官とかなんとかだった。わたしが出ていこうとしたとき、彼わたしに向かって言うの。ラスマン夫人、って彼が言うんだけど、あなたの目は美しすぎますって！　真っ白な中に瞳が真っ青！　彼がそう言ったの！　それからわたしもう一回そこに行ったら、彼、わたしに詩を朗読してくれた、その人は自分で詩を書くんだって。まあ、あなたって詩を書くのは自分だけだとも思ってるわけ？　頭韻を踏んでいるほうがいいかもしれないけど——もちろん脚韻は踏んでたし！　すごく素敵な詩だった。それから彼は言ったの。これはまったくの詐欺ですって！　まったくの詐欺！　虚偽の事実の提示だって彼が言うの。だから捜査するつもりだって。それから彼はわたしにもう一つ詩を朗読してくれた。それでわたしがお金を取りもどせるかって？　ダディ、言っておきますけどね。

わたしはお金なんて全然返してもらうつもりはないの！　あんなやつわ

わたしにとっては消えたも同然。わたしが、船乗りと？ 二度とないわ。ところで刑事調査官って高級官僚なの？ それでこれがもう一枚請求書ね、これはあなたが支払ってもいいわ。なんでアホイ！^{おーい} なんて言うの？ なんでこうなるか教えてあげる。

わたしにはお金が全然足りないわりに情が厚すぎるの。でもあなたはちようどその真逆なの。アホイ！ ——」

5. ロッテちゃん、悲劇映画を観に行く

「わたしのバッグの上に座らないでよ。そっちの席がいい。まだ週間ニュースの時間？ ナニ？ え？ まだ週間ニュースでしょ？ だから言っとくけどね、オランダで家具を買うつもりはないから。あなたは家具にそんなに詳しくないでしょ、ほら見て！ 消防隊——それに大体、ここはベルリンなんだからわたしは自分のツテがあるし、彼氏のケーテもそう言ってる……なんで？ 彼氏のケーテって言うわよ——あの人男みたいなものだから。言っとくけど。そのほうがずっと感じがいいってだけ。

ちょっと見てよ、また消防隊。どうして週間ニュースってこんなにたくさん消防隊がでてくるんだろ？ ナニ？ それで家具の配送っていくらだっけ……いくらになるか問い合わせたんだった、ちょっと待って……メモしておいた……ほらここ！ 今度はメモ帳が下に落ちちゃった、ちょっとそれ拾って！

もういい、わたしにやらせて……ちょっとどいて……ちょっとどいてったら！ 痛っ！ ……全然起き上がれないじゃない……映画の中でもう何か起こった？ 起きてない——ナニ？ くだらないわねえ、この映画の人のたちのお芝居、ここだけの話だけど……そうこれメモしておいたんだ。14 ペニヒで、たしか……1 キロあたりだったか1 ツァントナー¹²⁾あたりだったかわからなくなっちゃった……でもとにかく 14 ペニヒだった。

そんなの大したお金じゃないでしょ？ え？ あなたのバカっぷりと同

12) 1 ツァントナーはおよそ 50 キロ。

じくらいあなたの背が伸びるとしたら、きっと雨どいの水もがぶがぶ飲めるくらいの大男になれるね。今度は明るくなった。

いい映画館でしょ？　なんで壁をブルーにしたのかな？　ねえ、ケーテはすごく素敵な寝室をつくらせたのよ、ちょうど壁がこんな感じのブルーで——まあ、ここよりはもうちょっと明るいかんじだけど、そこに白いつや出しのワニスが塗ってあって、すごくいいの！　あなたもこんなかんじの買ってくれる？　ダメか。ねえ、あんな毛皮のコートロッテちゃんも欲しい、あそこにいるあの女の人が着てるようなの——そっちの女じゃないわよ、もうバカね、あの小柄で太った女が着てるの！　まあ、彼女には似合ってないけど——でもあんな感じの毛皮。

暗くなるのね……ちょっと何か読もうとすると、もう暗くなる。ダディ、これって、例のすごい映画？　みんなが映画批評でたくさん書いてたやつ？　そうなの？　これが？　ちょっと黙ってて、クレジットを全部読まないで。ちょっと静かにしてよ、読まないで……ブドフキン——ブドフキンって知ってる？　たぶんロシア人——よね？

ちょっと、リュッツォウさんのところに今ロシア人のメイドがひとりいるんだけど、あの娘一言もドイツ語ができなくて、片言のフランス語ができるだけ。変よね？　さあ、始まった。あとっておくけどね、もしわたしのおばさんがあんなふうにならずうずうしい手紙を書いてくるようなら……あのねえ、わたしは他人にひどいことして喜ぶようなことはしないけど、でも、あなただっけこう言うつもりかもしれないでしょ、一体なんのためにそんなことするんだって……とんでもないひとよ。

ちょっと、この映画新作なわけないね、あんな帽子もう誰もかぶってない！　衣装も全然合ってなかったし——ロッテちゃんはあんな帽子一度もかぶったことはありませんよ。ダディ、絶対にもう一つバッグを買ってくれないと。イブニング用に買ってくれたのはとてもかわいかった……でも昼用には一つも持ってないし。ちがうの、これはドライブ用。ブルーのバッグ？　あれは午後の分。午前中に使うバッグが無いの！

街へ出かけるのによ！ あなたにはわからないわね。そうだ、言っとくけど、そんなわけだから今日わたし一つバッグを買ったの。だってあなたは買ってくれないし。お金はあなたからわたしに返してくれていいから。まあいいじゃない。いつも言ってるでしょ。若くて老いぼれているよりは、かわいそう貧乏でお金持ちのほうがいいって。あれはなんて書いてあるの——？

恋する男どもは
あてにならない

わたしがいつも言ってることだね。ダディ、おとといの晩はシュパンナーゲルと一緒にだったの。彼、なかなかいい男になってた。

何それ——あの人とはもう関わるつもりはないわ、それにあなただって芝居がかった言い方してるだけでしょ——ただ、わたしが彼とちょっと結婚してたからって——！　ところで、あの人近いうちに中国へ行くって言ってた、あっちで内乱の調査をするつもりだって。すごく興味深いけど、わたし彼に言ったの、気をつけてって。戦地に行くのだったら、気をつけないといけないと思う。

ねえ、あの人わたしのタイプだわ。ちょっと静かにしてて……こっちが映画を観ようとしているときにしょっちゅう邪魔しないで！　ねえ、あの人わたしのタイプだ！　なんかティルデン¹³⁾みたい。スタイルすごくいいよね？　お腹も出てないし、スタイルいいわあ。残念、彼もういなくなっちゃった。

ダディ、帝国戦災補償局の件、考えてみたんだけど、こういうこと？　もし18パーセントが戦時補償として認可されたとして、それは子供たちの追加恩給に加えてってことだけだね、わかる？　それでもし弁護士が、

13) ウィリアム・ティルデン (ビル・チルデン) William Tilden (1893–1953)。アメリカ出身のスターテニス選手。1920年、1921年、1930年のウィンブルドン覇者 (GA11/765, 902)。

二回目の補償金を初回の補償金から差し引いたときに、国債の換算レートが引き上げられるように取り計らってくれれば、そしたら指輪を買い戻せるわけよね！

あなたは買い戻してくれないじゃない。言ってみなさいよ——あなたが買い戻してくれるの？ あなたが買い戻すことなんてないけど。ちょっと言ってみただけ。でもあなたは買い戻さない。ちょっと見て、どこで撮影したのかな？ きっとフランスね？ 弁護士はでも、訴訟が今年中に終わるとは保証できないって言ってた——わたし言ってやったの、ペーターは今年で10歳になります、あの子が成人になるまでは待ちますけど、そのあとはわたしの我慢も……。

笑うなんて！ わたしは独り身の女だから全部ひとりでやらなきゃいけないんです！ まあ、全部というわけではないけど、ダディのバーカ。カールちゃんは手紙書いてくれた？ 書いてこないって？ ナニ？ あの人書いてこなかったの？ わたしが彼に書こうかな、もしかしてカールちゃん、ダディがわたしにしてるのと同じ仕打ちを自分の彼女たちにはしていませんかって。

カールちゃんは紳士だからね。いや、前からも……カールちゃんのことはいもういいじゃない！ ヤーコップだってすごくいい人——そもそも言っておきたいんだけど……もしあなたのお友達が……うわ、あの女の人は何で目をぐるぐる回してるんだろ！ 大変ね！ どうしてあんなことしてるの？ ナニ？ ねえ、ちょっと説明してよ——なんのために男の人と一緒に映画を観に来てるんだか！

シーッ！ 映画館にまで来て、あの人たちなにをそんなにおしゃべりばかりしてるんだろ！ 何言ってるか全然わからない……！ ねえ、あの女の人は何で目を回しちゃったのよ？ あんなのをあなたはいいと思うの？ まあ、あなたの好みならね……時々ほんとに、一体あなたにはわたしのどこがいいのかって思うわ……まあ、あなたの勘違いってことだろうけど。きっとそうね。わたし金髪じゃないし、脚もきれいじゃないってあ

なたいつも言ってるし——でもほら、わたしの脚は極上ですけど！

ちょうどほら、あなたのお気に入りのプッティみたいに素敵でしょ！
ディックちゃんなんて問題にもならない。ムッシュはって？ ムッシュは
きれいな脚をしているかもしれないって？ そそる靴を履いてるって、そ
んな靴もう誰も履かないんですけど……ダディ、家の灯り消してきた？
そっか、それならいいけど。あの字幕なんだって？

撤退せよ——ただし我々三人の屍を越えて行け！

ダディ、今思いついたんだけど、ケーテに生野菜スープのレシピを書い
てもらわないと——わたしたち、この間ミュールベルクさんのところで食
べたんだけど、すごくおいしかった、すごく濃厚で、カニのスープみたい、
カニそっくりな味がするの、でも野菜しか使ってないの……今の見た？
今のあれ見た？ あの娘が馬の向きを変えるとこ見た？ すっごい。ナ
ニ？ あの人たちあそこでなに演奏してるの？ クレーネク¹⁴⁾？ わたし
全然好きじゃない。あなたはあれが好きなの？ わたし去年ホルネマンと
一緒にいたけど……ねえ、ホルネマンはもう南米に行っちゃった……彼は
ね、あちらの女性はみんなすごく素敵な洗えるシルクを着てるって手紙に
書いてきたわ。

ダディ、できたらほんととは——いや、やっぱりうちの部屋の絨毯を買っ
てくれたほうがいいわ、ねえ、本物のベルシャ絨毯……もう、ダディ、わ
たしがおねだりばかりしてあなたを困らせてるなんて、あなたが言えた義
理じゃないでしょ。あなたこそ、ほかの女性にどんな贈り物をしているか、
ちょっと見てみたいわ……もちろん住まいはわたしがもらいます。つまり
こういうこと。家主はまだ控訴するつもりなの、わたしたちが次から次に

14) エルンスト・クレーネク (エルンスト・クルシェネク) Ernst Krennek
(1900–1991)。オーストリア・ペーメン出身の作曲家。代表作の歌劇『ジ
ョニーは演奏する』は1927年ライプツィヒで初演 (GA11/709, 766, 866)。

住まいを取り換えっこしてるから。だから、アウクスブルク通り¹⁵⁾のヴィラックスたちは補償金と引き換えに部屋をベルンハルトに渡して、ベルンハルトはそれをヴィラーと交換するの、もしマリーが了承すればだけど、ただしマリーは了承しなくて、っていうのも彼女は離婚するつもりだから、彼女今はブロムベルクと付き合ってるの、でも彼女はきっとほんとに離婚はしないだろうから、だってそんなことしたらほんとにバカよ、それで、もしわたしがこれからヒッペルスに仲介してもらってヨーゼンシュテインと交換することにしておいて、家主がその前に亡くなって、それからローメルが自分の住まいをわたしに譲ってくれたら——そしたら、わたしが家をもらえるってわけ。

まあ様子見ね。天の神様はロッテちゃんを見捨てたりしないでしょう。あの男のことはよく知ってるし。ナニ？ え？ 変なの。男の人って、自分が何か説明してもらうときは絶対理解できないものね——そもそもあなたたちが理解できるのは……

おしまい。もうおしまい？ これで全部？ あ、ほんとだ。みんなもう席を立てる。ダディ、でも一つだけ教えてよ——これわかんなかったんだけど。

どうしてこの映画『オルレアンの処女』っていうの——？」

解題

今回の翻訳では、批評家・諷刺家というより作家トゥホルスキーとその話芸に着目した。トゥホルスキーのテキストの邦訳には、政治評論を集めた『ヴァイマル・デモクラシーと知識人』（野村彰編訳、ありえす書房、1977年）、最も論争的な写真集『ドイツ 世界に冠たるドイツ』（野村彰訳・平井正解説、ありえす書房、1982年）、そして二冊のトゥホルスキー選

15) ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム記念教会から南にほど近いところにある通り（GA11/766）。

集（岩淵達治，田辺秀樹，野村彰，平井正，藤本淳雄，保坂一夫訳，ありな書房，1984年，1989年）がある。訳出したもののうち「ロッテちゃん」シリーズの最終テキストのみが「ロッテちゃん，悲劇映画を見る」のタイトルで，岩淵達治氏による翻訳がこの選集の第1集『ヒトラーとゲーテ』に収録されている。ちなみにこの選集は，第2集『赤いメロディー』と共に，時事的・歴史的背景と不可分なそのテキストの両義性ゆえに日本語にしづらいトゥホルスキーの手引き書としても読める。私的な事情で恐縮だが，筆者が学生時代にトゥホルスキーを研究するきっかけを与えてくれた作品集でもある。訳出にあたっては先人の訳業に感謝しつつ大いに参考にさせていただいた。

初出はすべてトゥホルスキーが文芸欄用の記事を執筆する際に使用したペンネーム「ペーター・パンター」名義で，フォス新聞の「娯楽版（Unterhaltungsblatt）」に掲載されたものである。ただし「チーズの穴はどこから来るの——？」と5編の短編から成るシリーズ「ロッテちゃん」の訳については，初出の記事ではなく，ローヴォルト社から刊行されたトゥホルスキーの自選著作集『モナリザの微笑み』（1928年12月刊行）および『泣かないで笑いを学べ』（1931年10月刊行）に掲載された版を底本とした。初出の掲載時期とタイトルは以下のとおり。

「チーズの穴はどこから来るの？ Wo kommen die Löcher im Käse her?」1928年8月29日（初出タイトルに「——」は無し）

「ホテルのロビーにて In der Hotelhalle」1930年8月10日

「ロッテちゃん」：

「到着 Ankunft」1928年9月6日

「ロッテちゃん，財政を立て直す Lottchen wird saniert」1931年3月19日

「ロッテちゃん，浮気を白状する Lottchen beichtet 1 Geliebten」1931年1月23日

「ロッテちゃん，後悔する Es reut das Lottchen」1931年3月29日

「ロッテちゃん，悲劇映画を観に行く Lottchen besucht einen tragischen

Film」1929年10月20日

「チーズの穴はどこから来るの——？」は、トゥホルスキーの短編のうち再掲回数が最も多い作品の一つで、批評版全集で確認できるだけでも存命中の再録を含め70件近くを数える。トゥホルスキーの話芸を楽しみたければ、本作は欠かせない。シャンソンの作詞家としても知られていた彼のドイツ語は、声に出して読むパフォーマンスに向いているが、本作は当時登場したばかりのラジオ放送でも朗読され、またレコードに録音されることもあった。同年代の俳優でカバレティストのパウル・グレーツの朗読で1930年に収録されたレコードはCD化されているⁱ⁾。また戦後から現在に至るまで、トゥホルスキーのオーディオブックで本作を耳にすることは少なくない。例えばオットー・シェンク（1930–2025）のライブ独演会のレパートリーには本作が収められている。その名演はレコードやテープ、CDとして流通したのちⁱⁱ⁾、現在は配信の形で鑑賞できる。朗読者によって異なる味わいができる本作は、まさにドイツ語版落語と呼んでよい。

「チーズの穴はどこから来るの——？」では説明したがる人たちが面白おかしく活写されているが、「ホテルのロビーにて」では、大都市のトバスでもあるホテルのロビーに、説明したがる男が登場する。1924年にパリに拠点を移し、1930年1月すでに正式にスウェーデンに移住していたトゥホルスキーは、1928年から1929年にかけて度々講演会や自作朗読会に招聘され、ケルンなどドイツ各都市を回っている。ベルリンでの宿泊先も、このころは専らホテルだったようだ。また1930年前後といえば、

-
- i) *Wo kommen die Löcher im Käse her – ?* Interpr.: Paul Graet, Parlophon [Berlin], 1930. Best.-Nr. B. 12219. Vgl. Lareau, Alan: *Kurt Tucholsky-Discographie. Schallplatten, Musikkassetten, CDs 1920–1996*, Marbach am Neckar, 1997 (T47, 984). Wieder in der CD-Aufnahme: *Theobald Tigers Trichter ... Aus Tucholskys Plattenschränk---* archiphon ARC-001, 1997.
- ii) *Humor ist 2. Teil.* Interpr.: Otto Schenk. WM Produktion [Wien: Wien-Melodie] 1 CD. Best.-Nr. WM 120 037. Lareau (1997), T227, 990.

古典ハリウッド映画『グランド・ホテル』(1932)の原作となったヴィッキー・バウムのベストセラー『ホテルの人々』(1929)が想起される。バウムが編集に関わっていたウルシュタイン社の雑誌『淑女』にもトゥホルスキーは寄稿しているが、彼が、まさに国際的に名を上げようとしていた彼女のこの長編小説を読んでいたかどうかは、定かではない。ただこの小品に登場するホテルは、バウムの長編小説に登場するような、ベルリンと明記しているとはいえどこにあってもおかしくないグローバルな世界を体現するホテルと比べて、さまざまな意味で対照的である。

「ロッチェちゃん」シリーズは、先述の通り、自選著作集に収録された版をその登場順に訳出した。このキャラクターは、作家の当時の交際相手で、戦後1962年になって暴露本を出版して話題となったりザ・マティアスがその設定に影響している。ロッチェちゃんのモデルをめぐるのは日本語でもその概略を知ることができるⁱⁱⁱ⁾。暴露本の内容がすべて真実かどうかは定かではないが、この女性がシングルのワーキングマザーで車の運転ができ、1930年前後に作家と親密な関係にあったことは間違いないようだ。

しかしここでは作家の私的な交友関係ではなくテキストの語り口の特徴をみておきたい。トゥホルスキーの手による一人称語りのキャラクターとしては、「ヴェンドリーナー氏もの」が知られていた。このシリーズは1922年からカスパー・ハウザーの筆名で『世界舞台』誌に掲載され、合計17編からなる。そのうちいくつかは自選著作集にも収録された。当時の社会風刺を多く取り込んだこのシリーズの語り手は、ユダヤ系ビジネスマンを想起させるヴェンドリーナー氏である。テキストは「落ち」を除いて意図的にほぼ一段落で書かれ、聞き手のセリフは一切登場しない。これに対してロッチェちゃんには、「ダディ」と呼ばれる相方も時として会話に加わる。掛け合いの相手が予め設定されているこのシリーズは、ヴェンドリーナー氏よりはるかに落語的であり、またボケとツッコミの境界が曖昧

iii) 『ヒトラーとゲーテ』, 152 頁以下。

な夫婦漫才のようで、演劇的だ。

批評版全集のコメントによれば、1930年、「ロッテちゃん、悲劇映画を観に行く」と同名のタイトルで当時の南西ドイツ放送局が30分のラジオドラマを制作し、同年11月7日の夕刻に同局と南部の地方放送局で放送されたという（GA11/764）。このシリーズも、いくつかは戦後1960年代に、東独ではアンネマリー・ハーゼ（1900–1971）、西独ではグレーテ・ヴァイザー（1903–1970）による朗読が録音されている^{iv)}。また東ドイツでは1982年に「到着」を除く4つのテキストがすべてラジオドラマとして放送され、その音源は資料として保存されていることが確認できる^{v)}。

ところでロッテちゃんの「愛人」として登場するダディも、セリフは少ないが「説明したがる男」だ。ダディは車の運転はできないが、正しい文法を知る教養人としてロッテちゃんの言葉遣いを折に触れて訂正する。しかしロッテちゃんに言わせれば、ダディは説明される側に回ると、相手のことがまったく理解できないという。「説明する側」と「される側」の間にあるおかしさは、今でも誰もが経験しうることではないだろうか。

iv) Vgl. Lareau (1997), 269, 618, 619, 621. ハーゼは、1921年にトゥホルスキーが深く関わっていたカバレット『響きと煙』の舞台でカバレティストとして活躍していた同時代人である。彼女はナチ時代の亡命を経て戦後は東独に帰国していた（GA22/316）。ヴァイザーは1930年代以降はウーファの娯楽映画で、戦後50年代は郷土映画でおなじみの性格俳優だが、1930年から1933年までカバレットの舞台に立ち、1933年8月の時点でなおトゥホルスキーのシャンソンをベルリン、クーダムのカバレット舞台上で歌ったとの記録が残されている（GA20/618）。

v) 1982年8月から9月にかけて、4部構成で放送。ダディ役にはクラウス・ピオンテック（1935–1998）、ロッテちゃんにはユッタ・ヴァホヴィアク（1940–）が演じた記録がある。ドイツ公共放送連盟（ARD）のデータバンクより以下を参照：<https://hoerspiele.dra.de/detailansicht/1447886>; <https://hoerspiele.dra.de/detailansicht/1447887>; <https://hoerspiele.dra.de/detailansicht/1447888>; <https://hoerspiele.dra.de/detailansicht/1447892>（最終閲覧：2025年9月2日）。

しかしロッチちゃんはダディの説明におとなしく納得し従うようなタイプではない。ロッチちゃんは、若く見た目を武器にできる女子でもなく、完全無欠のワーキングマザーでもない。彼女は聖女でも悪女でもなく、大いに欠点はあるものの信頼できる女友達と愛人にめぐまれ、実にたくましく描かれている。

このシリーズは、フォス新聞が1931年10月1日付で作家との契約を解除したことで、残念ながら事実上打ち切りとなった(GA13/497)。すでにナチのブラックリストに載っていたトゥホルスキーのテキストが『世界舞台』誌上からも消えるのは、そのおよそ1年後のことである。フォス新聞に掲載された最後のテキストは「ある夫婦の語る小咄」という、これも一種の夫婦漫才のような小咄だった。先述の『トゥホルスキー選集』第1集に、野村彰氏の訳で収録されている。